

# ワークショップを活用した防災教育支援の取り組み について（命守会の活動の記録と今後の展望）

田代誠司\*・山口健司\*・坂本京子\*\*

\*下関地方気象台 ， \*\*日本気象予報士会西部支部

## 1. はじめに

下関地方気象台と日本気象予報士会西部支部（以下、予報士会西部支部）、日本赤十字社山口県支部（以下、日赤山口支部）の3者は、自然災害から子どもたちや地域の方々の命を守るため防災教育を推進することを目的に「いのちを守る防災教育を推進する会（略称：命守会）」を平成27年1月に結成した。

命守会では、山口県教育庁と連携した防災教育プログラムや教職員研修会等で、これまでに50回を超える大雨防災ワークショップ（以下、大雨WS）を行っている。また、平成27年度は「防災教育チャレンジプラン（以下、チャレンジプラン）」に参加して、大雨WSを実施する中で得られた成果を生かして学校の授業で大雨WSが実施できるように運営マニュアルの作成を行った。

また、平成28年度からは、それまでの成果を踏まえて、防府市教育委員会と連携して、3年間で市内の全小中学校が大雨WSをできるようにするためのモデル事業を行っている。

本稿では、命守会のこれまでの活動の記録や成果を取りまとめるとともに、今後の活動の展望を考察してみた。

## 2. 大雨防災ワークショップとは

命守会の大雨WSは、もともとは「気象庁ワークショップ」\*1をベースに、山口県の地域の特徴を加味し、学校教育現場で使ってもらうことを意識して50分程度で実施できるように改善したものである。

気象庁ワークショップは、特別警報の新設をきっかけに気象情報をより深く理解してもらうツールとして開発された。開発中の実践の中で防災教育の効果が非常に高いことが示されている。山口県用に改善を図った大雨WSも、第1表にアンケート結果を示すが、高い教育効果を維持している。

大雨WSは、経験したことがない大雨時にどのような準備や行動をとるのかをグループワークで考えることにより、いざというときに、自発的に行動できる知識を効果的に身につかせることを目的としている。

## 3. 命守会の結成

命守会の結成前の平成26年10月から命守会加盟の3者で協力して中・高校で5校、大雨WSを実践した。参加者に対して実施したアンケートではその教育効果が高いこと、また、参加した教員の評価が高かったことから、より効果的に幅広くワークショップ等を活用した防災教育を支援するために、3者で命守会を結成することとした。この3者は、気象の専門機関、気象の専門資格者、災害救護団



第1図 大雨WSの概観図

体であり、互いに連携することによって、特徴を生かしながら強みを発揮することができる。

命守会結成にはもう一つ目的があり、それはチャレンジプランへの参画であった。チャレンジプランに参画することによって、取り組みについて防災や教育の専門家から適切なアドバイスが得られる上、評価も受けることができる。また、成果物についてはホームページ上でいつでも入手できるなど成果を全国に共有できる仕組みもある。

以上のような目的を持って、平成 27 年 1 月 8 日に会が発足した。

#### 4. 2015 防災教育チャレンジプランへの参加

チャレンジプランへの取り組みでは、大雨 WS を山口県教育庁等の協力を得ながら小学校から高等学校において約 20 校で実施するとともに、実施校の教員や事前に参加を呼びかけた地元市町の教育委員会、防災担当職員等と意見交換をして大雨 WS のプログラムの改善を図った。改善内容としては、山口県の災害事例や動画を多く取り入れること、1 時限（約 50 分）に対応するためのワークシートのシンプル化及び付箋紙の有効活用などである。また、学校の教員が自ら大雨 WS を実施するための運営マニュアルを作成した。マニュアルには、気象の専門的な部分のレクチャーが苦手な教員のためにナレーション入りのビデオや授業展開例、気象や防災の各種資料も用意している。

こうした取り組みの結果、平成 28 年 2 月の「2015 年度防災教育チャレンジプラン活動報告会」において防災教育特別賞を受賞した。評価のポイントは以下の通り。

「ワークショップのシナリオについて、約 20 校に及ぶ小・中・高の教職員と連携し、子供が主体的・積極的に参画可能な完成度の高いプログラムを作成した点、広域な地域における学校を対象とし、3 団体が高度に連携しながら効果的な防災教育活動を実践できている点、気象予報士会との連携による TV 放送等、広報活動を積極的に実施しており、今後の展開に期待が持てる点などが高く評価されました。」（防災教育チャレンジプラン HP より引用）

#### 5. 平成 28 年度の取り組みと防府市教育委員会との防災教育支援事業

平成 27 年度は、大雨 WS を山口県の学校教育現場で活用できるようにすることと、広く認知させることが活動の主体であり、おおむね目標を達成することができた。平成 28 年度の目標は、学校が自ら継続的に大雨 WS を実施できるよう、実践者となる教員を育成することである。そのため、命守会では防府市の教育委員会と連携して防災教育を支援するためのモデル事業を行うこととした。モデル事業は、3 年計画で防府市全 27 校の小中学校で、教員による大雨 WS を活用した防災教育を進めていくものである。平成 28 年度は、モデル校を 5 校指定し、運営マニュアルを活用して教員が大雨 WS を実施した。いずれの学校でも、学校長の評価が高く、今後も継続して実施したいとのコメントをもらっている。また、担当教員が自分の工夫を取り入れることによって、スムーズな運営を行った事例もあり、これら事例を踏まえながら今後の改善につなげたい。

一方で、普及という観点からも継続的に取り組む必要があると考え、県の教育庁と連携して 10 校余りで大雨 WS を実施するとともに、運営マニュアルの配布を行った。一部の学校ではそれを活用して独自に大雨 WS を実施した事例もあった。さらに、実践者となる教員養成の観点からは、教職員研修会や校長会等において教職員に対する大雨 WS も実施している。

#### 6. 大雨防災ワークショップの効果

命守会では、これまでに 50 回を超える大雨 WS を実施・支援して、児童生徒 1,500 名、教職員 500 名以上が参加した。このなかで、児童生徒だけでなく教職員や保護者・地域住民も参加した大雨 WS も数箇所を実施している。違う世代が一緒に参加する WS では、大人と子供の考え方や発想などが（自分が考えていたことよりも）違うことがわかるなどの大きな発見がある。例えば、生徒がお年寄りや

自分より小さな子供のことを気遣う内容の発表があるなど、普段大人には見せない顔を見せることもあった。教職員からも、いつも学校では見られない児童生徒の頼もしさに驚く場面も多々あったというのを幾度となく聞いた。大雨 WS は大人に指示されて行動するのではなく、自分達が主体となって家族をどう守るのかを考えるというのが大きな特徴で、その効果に学校側も大いに期待を持っていることが実感された。これらを考えると、大雨 WS という一つのツールで、地域を巻き込んだ防災教育の可能性も示していると考えられる。

平成 27 年度の実施校に関しては、教育効果を確認するために参加者（児童生徒）に対して事前と事後に同じアンケートを行っている。また、県教育庁と連携して教員研修会時の大雨 WS では教職員へのアンケートも実施している。

### (1) 児童生徒へのアンケート結果

平成 27 年度に学校での WS 実施の際に児童生徒に対して事前と事後に大雨に関する防災知識のアンケートを行った。その結果を第 1 表に示す。いずれの質問事項にたいしても、事前と事後の意識の違いが大きく、大雨に対する防災意識の向上が大きく見られた。これらのことから、大雨 WS は、防災教育のツールとして非常に効果的なものであると考えられる。防災教育の効果については、大雨 WS のベースとなった気象庁ワークショップマニュアル\*1にも同様なことが、教育関係者の専門家の分析として掲載してある。

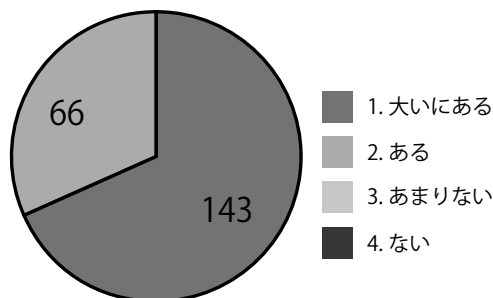
第 1 表 児童生徒へのアンケート調査結果

アンケート内容	事前	事後
大雨が降る前に、どんな準備をすればよいか知っている	32%	90%
大雨災害から身を守るための知識を持っている	19%	71%
大雨は自分たちにとって身近な出来事だ	67%	83%
自分の住んでいる地域のどこがどのように危険になるのか調べている（調べたい）	20%	77%
大雨災害について友達や家族と頻りに話し合っている（話し合いたい）	23%	82%

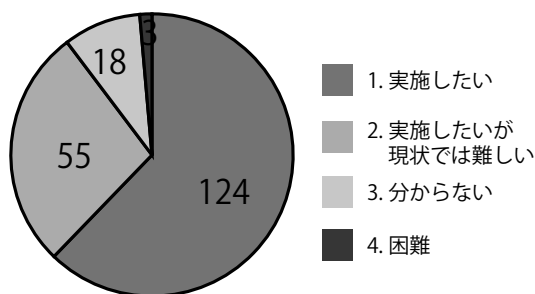
### (2) 教員へのアンケート結果

命守会では、平成 27 年度と 28 年度に県教育庁が実施する安全教育研修会の中で山口県内の教職員を対象として大雨 WS を実施した。参加者は、27 年度が 126 名、28 年度が 85 名であり、大雨 WS 後にアンケートへの協力をお願いした。第 2 図は、WS の「防災教育としての効果について」の質問である。回答のすべてが、「大いにある」もしくは「ある」であり、教育関係者からも大雨 WS が防災教育の効果が高いと評価されている。

一方で、参加者に「自分の学校（クラス）で大雨 WS を実施したいか」についての問いが第 3 図である。「実施したい」が 60% と過半数は超えているものの、「現状では難しい」との回答も 25% 見られた。この理由については、学校行事が過密等の理由で難しいとの判断が多かった。また、低学年への大雨 WS の実施が難しいと感じている参加者もいる。



第 2 図 防災教育の効果についての問い



第 3 図 実施したいかについての問い

そのほか要望として、学校で実施するための手引き書や映像を希望している参加者も多かった。

これらに要望や意見に関しては、運営マニュアルに反映させている。

## 7. これまでの活動を振り返って

### (1) 大雨WS

平成 26 年 10 月から始まった大雨 WS を活用した防災教育支援事業は、山口県教育庁との連携や防災教育チャレンジプランへの参画などを経て、防府市教育委員会とのモデル事業まで発展してきた。それは一つには、日赤山口支部、予報士会西部支部、气象台という異なった団体が、それぞれ特長を生かしてお互いに協力してきた結果である。

しかし、基本は大雨の学習にワークショップを取り入れたという「良い防災教育の素材」があったためと考えられる。命守会では、小学校 3 年生から一般まで実に幅広い人に大雨 WS を実践し、また、児童生徒と保護者・地域の人と一緒に実施したこともあったが、問題なく実践できた。

さらに、学校で実践できるように改善を重ねた結果、防府市でのモデル事業の成果や教職員研修会を受けて自分の学校で大雨 WS 実践する教員が出てくるなど、運営マニュアルは学校で活用しやすいものになったと考えられる。

### (2) ファシリテーターの立場から

大雨WSはグループ学習で意見をまとめるため、年齢が上がるほど理解が深いと想像していたが、実際に小学生と中・高校生ではさほど発表内容に違いはなかった。逆に小学生の方が、豊かな想像力をもって災害に立ち向かう準備や行動の判断をする傾向にあることに驚かされた。例えば、ハザードで浸水予想 50 センチのマンションに住むグループは、車椅子の祖母が避難する大変さや避難所生活での不便さを思いやり、上層階のお宅に避難することを決断した。また、数々の行動の理由付けに「命は一つしかない」「命は大切」と記し、自助の大切さも理解している。渡邊ら (2015.) \*2が西岐波小・中学校で実施したアンケートでは、年齢が上がるにつれて防災について家族間で話題にしなくなるという結果があった。小学生がこの大雨WSを体験することで、感じたことや学んだことを持ち帰って家族に話し、我が家の防災について話し合うきっかけになる効果も期待したい。これらのことから大雨WSを義務教育の早い段階で行う効果は充分にあると感じている。

## 8. まとめ (今後の展望)

学校で継続してWS等の防災教育を実施してもらうためには、体系的で網羅的である必要がある。例えば、中学校を例にとると、1年次に「大雨」、2年次に「地震津波」、3年次に「台風」を用意していれば、防災教育の体系化、ひいては継続的な実施につながると考えられる。また、理科や社会などの授業内容やカリキュラムに沿った授業展開例・計画書案などの提案も行っていく必要がある。

現在、防府市教育委員会と連携した防災教育の支援事業を継続中であるが、この中でどのくらい可能であるか検討を行っていくことになる。これらの成果を持って県教育庁などと連携して県内へ広めていくことが課題となる。

命守会で作成した大雨WS運営マニュアルについては、日赤山口支部のホームページに掲載している (<https://www.yamaguchi.jrc.or.jp/大雨防災ワークショップ運営マニュアルダウンロード>)。マニュアルと資料を学校や地域で活用いただき、子ども達や地域の方々の防災・減災への取り組みに役立てていただければ幸いである。

参考文献：

\*1 気象庁ワークショップ (<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/knownow/jma-ws/index.html>)

\*2 渡邊薫乃、山本晴彦、坂本京子：「1999年台風18号により高潮被害を受けた宇部市西岐波における小中学生の防災意識」、自然災害研究協議会中国地区部会研究論文集 第2号、2015、33-36